

陸軍省城絵図 高遠城郭之図検証作業

高遠城跡遺構調査報告書

平成24年8月28日調査29日製図30・31日考証

追加調査24年9月14日・15日、17日製図考証

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原道晴

長野県の城絵図展開催に際し、陸軍省城絵図高遠城郭之図の検証作業を行いました。昭和60年高遠城航空写真測量図を参考に、現存遺構縄張調査を実施。高遠城は南を三峰川と北を藤沢川に挟まれた比高80mの断崖上に構築された山城で、尾根側を約300m巾20m強の横堀で断ち切り、搦め手木橋を虎口とし（堀底に隠し通路が1か所あります）約300x400mの城域を形成しています。城内は標高800m強で整地され、巾30mに近い大規模な空堀で本城、二の丸等を区画し、平城の景観を有しています。

城は武田信玄による天文16年1547年の築城と伝え、天正10年1582年織田信忠による武田家滅亡の際の武田勝頼の弟、仁科盛信の戦いは戦史に残るものです。以降、織田、徳川、豊臣の支配に於いて、毛利秀頼、保科正直、徳川政権下で保科正光、その子で将軍秀忠の子、保科正之、正之会津転封後は鳥居氏、幕府領の時代を経て、内藤氏約180年の治世で幕末を迎えました。350年の間、城は伊那谷中心として栄えてきました。城は高遠城址公園となり、廃城後植栽された1500本の桜で日本3大桜名所とされ、時期には30万人以上の観光客が訪れ、城跡も通路、駐車場等その対応による変化を余儀なくされています。また、昭和48年国指定史跡となり、日本100名城に認定されています。

本城は約70m角、1199坪とされている。東に枡形虎口があり、東面一帯に土塁が残され、枡形虎口と想定される城門周辺20mほど土塁が低くなり、その位置と想定されます。土塁の南端部分は二層櫓跡である。南面西側にも土塁が残存し、その西に笹曲輪への通路が確認でき、陸軍省城絵図（以下絵図）に城門が描かれている。本城内には絵図に櫓が西北に2基、西南に1基、土蔵が3基あったとされるが、櫓台等の痕跡は明瞭でない。南曲輪への土橋の手前の笹曲輪への下り通路は近代のものである。本城堀は20－30mの幅があり、正保城絵図では水堀とされ、今も東側に水が残る。西北側、勘介曲輪との間が大規模に埋め立てられている。南曲輪への土橋も近代のもので、元は空堀を下

ったところで木橋があり、両曲輪に門があった。南本城堀、西端崖際には城壁があり、防御柵が描かれている。なお、本城の表記については、正保城絵図は本丸としているが、陸軍省城絵図は本城としている、ここでは本城表記に統一した。

笹曲輪は2段に削平され、約20m x 30mの広さ、240坪とされる、本城西南角から通路がある。曲輪の南側の城壁に柵と西本城堀への門が描かれ、正保城絵図では勘介曲輪へ帯郭と木橋でつながっている。現在の勘介曲輪からの通路は、本城堀が埋められているが、この通路の痕跡と思われる。本城堀の南端、勘介曲輪と笹曲輪の境は崖からの侵入防止柵が描かれている。本城南土橋付近からの現在の通路は近代のものである。

南曲輪は約50m角で600坪とされる。絵図には本城側に木橋と城門、二の丸内側に土橋と枡形門、北側本城堀内の、東端堀底に通行を遮断する柵、西端には崖からの侵入防止柵が描かれている。現在、土塁等の痕跡は見当たらない。正保図では二の丸との間に堀も枡形もなく城門のみで、のちに本城側と法幢院側から空堀で分割され、土橋と枡形が構築された。南側、法幢院曲輪との間の橋は近代のものである。

法幢院曲輪 陸軍省は法幢院曲輪を城内と認識していないのか、描かれていない。法幢院曲輪は大堀切の外にあり、今も東、南は空堀で囲まれている。当初からの遺構とすると武者隠しのような目的と思われる。城内からの通路は二の丸東南の堀底土橋である。

二の丸は本城の東、北を囲む広大な地域で、東側で南北160m、東西70m、北側は壊滅しているが、約20m x 60mと推定される。大手、搦め手からの通路は三の丸から、この二の丸の北、今、土橋となっている木橋と大きな枡形虎口を経由し、本城へ通じている。土橋は近代のものである。曲輪は二の丸内、外二段に削平され、内が西で、通路、外が東で、屋敷跡となっている。東側全面と北側の枡形門東部分のみ土塁が残存する。土塁天端は巾3、5m、南では6mにもなる。東北分は昭和12年建築の際、土塁の内側を半分以上削っている。二の丸堀は東南に土橋があるが、空堀と場外の崖を防衛する壁であって、形状はともかく、橋の役割はないと考える。城外へは東南部に隠し通路があり、一旦、南空堀内へ下り、空堀に構築された土橋を渡る、この土橋と通路は現存する。二の丸北は勘介曲輪へ通じるが、大きく改変している。現在、二段に削平され、東より、最大10m低くなる。ここまでの標高は本城等約805mで

あるが、三の丸も西側で、二段位削平され、10m低くなる。自然地形がこの部分で低くなり、大手虎口に向けて次第に低っていると考えられるが、本城堀、二の丸堀の埋め立てにより、削平された可能性も考えられる。従って、二の丸堀も北側の西半分、西側が埋められ、原型をとどめていない。今は埋め立てられた二の丸や二の丸堀、本城堀跡も勘介曲輪と表示されている。西北にあった櫓台もその位置すら確定できず、特徴的な横矢掛かりの屏風折も痕跡をとどめない。

勘介曲輪は約50 x 70m、769坪とされているが、二の丸との通路周辺、三の丸との空堀。本城堀との空堀が埋め立てられ、140m x 110mの強大な敷地となっている。そのため、本城、二の丸、勘介曲輪等大手口への防衛機能がかき消されている。正保図では二の丸との境に城門が描かれている。曲輪の南側と西側に土塁を残している、西北隅あたりの土塁は櫓跡があった場所であるが、堀埋め立て時の削平の可能性もある。二の丸堀を埋め立て、西崖に達する部分は丸石で土止めを行っている。高遠城にとって、この本城堀と二の丸堀の埋め立ては城跡の景観を大きく損ねている。

三の丸は東西に大手、搦め手を有し、その間、186間、道幅4間5尺とされる。現状、東西約360m、東、南を空堀で囲い、北は急峻な数10mの崖で、天然の要害となっている。北側の一部に土塁があるが、この崖に土塁の必要を認めないため、単なる屋敷地造成の掘り残しと考えられる。大手口は南側に当時の石垣を残しているが、全体的に大きく改変されており、その旧観を求めるのは難しい、絵図では大きな枡形曲輪が描かれている。搦め手口は木橋と枡形であるが、後世、土橋とされ、コンクリートで固められている。ただ、東空堀が北の崖にいたところで、絵図に描かれた柵の位置が城壁となっている。

以上、信頼できる正保城絵図と陸軍省城絵図のみを手掛かりに、現状遺構の分析を試みた。要害の地に立地し、大手、搦め手、二の丸、本城虎口の要所を巨大な枡形で固め、大規模な堀を巡らせる近世の代表的な山城遺構であるが、本城堀等特徴的な景観が失われ、本来その場所にはない移築建築や、存在しない土橋や橋が城跡としての機能を不明確にしているのは大いに惜しまれる。桜時期以外の城跡公園の活用が、城の見方が理解できるような、整備を願ってやまない。